

6. そこで、彼らは、いっしょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。

「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興して下さるのですか。」

7. イエスは言われた。

「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。

それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。

8. しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。

そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

αἴα. **l̄h̄mesqe** dunamin **epelqontoj** tou/ agiou pneumatoj efV uimaj

lanbanw

**epercomai** pt. aor. 臨む、(強い者、さばき、災いが)襲う、迫る、追ってくる、(時代が)来

る

fut. take

(1) come along, appear, come from (AC 14.19)

(2) of time come (on), approach (EP 2.7) overtake (AC 13.40)

(3) as coming against, i.e. w. hostile intent attack, come on (LU 11.22)

(4) of what comes fr. heaven come (down) on (AC 1.8).

kai. **eseqe** mou marturej en te Verousalhm

fut.

kai. **lenð pash| th| Voudaia| kai. Samareia|**

kai. **efwj escatou thj ghjÅ**

**escatoj**( last, final; 最後の、後の、終わりの、終末の

(1) of place farthest (LU 14.9); subst. **to. escaton** the end, the farthest point (AC 1.8)

(2) of time latest, last (JN 6.39) **ta. escata** the last state, the end (MT 12.45);

the neut. **escaton** as adv. finally, last of all (MK 12.6);

(3) of rank (opp. **prwtos** lowest, least important (MT 19.30);

(4) of a series last, final (RV 1.17).

「終末論」: Eschatology ギ エスカトスと ギ ログスに由来

**martuj**( **marturoj**( o` a witness;

(1) as a witness to ascertainable facts;

(a) legally (MT 26.65); (b) gener., as one who testifies to something (RO 1.9);

(2) as one who declares facts directly known to himself;

(a) fr. firsthand knowledge (AC 1.22); (b) fr. firsthand experience (HE 12.1);

(3) as one who tells what he believes,

even though it results in his being killed for it witness, martyr (AC 1.8; RV 17.6).

**dunamij** : 奇跡、人並み外れた力、神の力、大能、力あるわざ、権威、権力、権能、偉大な力、能力、万象、  
(計り知れない)力、(人の病-長血-を癒す)力、(死んだ人間をよみがえらせる復活の)力、(悪霊を追い出す)力、  
(人を悔い改めさせる)力

**dunamij**

# 説教

今日は聖霊降臨節（ギリシャ語で「**penthkosth**、(ペンテコステ)～五旬節の意味～」）です。  
集まっていたイエスさまの弟子たちに聖霊が降ってキリスト教会が誕生した記念すべき日です。

聖霊は神さまです。

父なる神さまと子なる神さま（イエスキリストさま）と並ぶ、第三位格の神さまです。

これら父、子、聖霊の神さまは三人ですが実はおひとりの神であられ、これを三位一体の神と呼びます。

イエスさまはおよそ三年にわたる公生涯を終えた後、

弱冠三十歳余りにして私たちの罪を贖うために私たちの身代わりのいけにえとして十字架で死なれ、三日後によみがえられました。

そして、四十日間弟子たちに現れて後、天に挙げられていきました。

その間のことが使徒の働き 1:3 に記録されています。

「イエスは苦しみを受けた後、

四十日の間、

彼らに現われて、

神の国のことを語り、

数多くの確かな証拠をもって、

ご自分が生きていることを使徒たちに示された。」

ギリシャ語本文を見ると、

この文の骨子は、「キリストご自身は、生きて、現れ、語りながら、彼らの前に（あるいはそのすぐ側に）立たれた」となります。

つまり、イエスさまは、まずご自身がおよそ三年の間人々に正しい道を教え、行って、それを弟子たちに継承なさいました。

そして、ご自身は天に挙げられいなくなるだけではなく、

復活のイエスさまは、生きて、彼らに現れ、彼らに語りながら、彼らを導き、彼らと共におられて、彼らを守られたのでした。

そうして、イエスさまは、天に挙げられる直前に冒頭のみことばを予告されて、

復活節（イースター）から七週目の日曜日に聖霊を弟子たちに注いでイエスさまの福音を全世界に宣べ伝えさせたのでした。

8 .        **しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。**

**そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」**

「臨まれる」と訳される言葉は、

自分よりも大きな者、

例えばさばきや災いが襲いかかってくるとか、

～の時代がやって来るといように、

人間の力ではそれに逆らうことも抵抗することも出来ない、

不可抗力的な、圧倒的に大きな流れが自分を巻き込んでいくことを意味します。

「力」はギリシャ語 **δυναμις** (ドゥナミス) の訳語で、  
並みの力ではない、人並み外れた力、例えば不治の病を癒す力とか、  
悪霊を追い出す力とか、死んだ人間をよみがえらせる力を意味する場合などに使われ、その意味で「奇跡」とも訳されます。  
それは人の力をはるかに超えた神の力、神の全能の力を意味します。

それでこの **δυναμις** (ドゥナミス) という言葉から「<sup>dynamic</sup>ダイナミック」とか「<sup>dynamite</sup>ダイナマイト」といった英語の言葉が出来ました。  
それは、どんな硬い岩をも木っ端微塵にぶち壊す、恐るべき破壊力を持った、ダイナミックな神の全能の力です。

つまり、イエスさまは、  
これから聖霊が弟子たちの上に圧倒的に襲いかかって来るから、  
そうしたら弟子たちは、  
人間の力をはるかに超えた奇跡の力、神の全能の力、  
不可能を可能にし、どんなに不信仰な世の現実も木っ端微塵にぶち壊して  
この地に神の国をもたらすことのできる、とてつもなく桁外れの神の全能の力を受けると言われたのです。

そして、神の全能の力を受けた弟子たちは、具体的にはどうなるというのでしょうか。

イエスさまは言われます。

「そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

エルサレムから始めて、

次にユダヤとサマリヤの全土、

そしてそれを越えて小アジア、

さらにはヨーロッパ、アメリカ、豪州、東アジアとアフリカ、

そして「地の果て」(直訳「地の終わり」「地の最後」「地の終末」)にまで「わたしの証人となります」と言われます。

イエスさまの福音を忠実に証言する証人となると言われます。

つまり、弟子たちは、絶大な威力を誇る神の全能の力をもって、**キリストを証しするようになる**と言われるのでした。

言葉、民族、地域、思想、

習俗、学歴、身分の壁を越え、

あらゆる不信仰、貧しさ、不便、迫害、弾圧もみな乗り越えて、真理を宣べ伝え、キリストを証しする「証人」となると言います。

しかも、それは自分で努力して修行を積んでなるというのではなくて、

一方的な聖霊の力によって「なるであろう(未来形)」という言わばイエスさまの予告です。

もしも自分で自分の力で「なる」というのなら、それはおぼつかないどころか全くの不可能な話でありましょう。

当の弟子たちも、ついほんの四十日前までは、

(イエスさまが十字架で死なれた時には)自分のいのち惜しさにチョロチョロと逃げ回っていたばかりです。

彼らはひとり残らず全くの臆病者でありました。

でも、神の力を帯びて生まれ変わります。

全能の神の力を受けてキリストの復活の証人となるのです。

いのちを賭けてキリストを証しするキリストの証人となるのでした。

「証人」と訳される言葉は「**martuj** マルトウス」ですが、  
二千年前に始まった初代教会以来のち賭けでキリストを証するキリスト者が後を絶たないため、  
元来「証言」を意味するこのギリシャ語は後には英語で「殉教者」を意味する「martyr」になりました。

結局、その後、

イエスさまの予告通りに弟子たちに聖霊が臨み、  
弟子たちは全く新しく生まれ変わってキリストを大胆に証するようになります。

彼らは、

自分たちのいた家や近くの通りでは勿論のこと、  
会堂や神殿でもキリストを証しし、さらには議会の真ん中でも大胆にキリストを証するようになります。  
所構わずキリストを証します。  
殺されることも覚悟してキリストを証します。

弟子たちの中のステパノは、議会に引き出されて石打ちの死刑に処されます。

しかし、彼は最後の死ぬ瞬間までキリストを証しし続けました。  
そして、それを可能にしたのは聖霊の力だと聖書は記録します。

「しかし、聖霊に満たされていたステパノは、

天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、こう言った。

『見なさい。

天が開けて、

人の子が神の右に立っておられるのが見えます。』

人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。

そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。

証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。

こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。

『主イエスよ。

私の霊をお受けください。』

そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。

『主よ。

この罪を彼らに負わせないでください。』

こう言って、眠りについた。 」 使徒 7:55-60

「聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ.....」(7:55)  
ステパノをしてキリストを証しさせたのは、実に聖霊だったということです。

このことはペテロも同じです。

ペテロは肝心な場面でイエスさまを知らないと三回も言った裏切り者です。

イエスさまが裁判にかけられて殺されようとしている時、

自分もどうにか勇気を振り絞って裁判が行われている大祭司の庭まで行ったけれど、

そこで一緒に焚き火をしていた人に「あんたはあの裁判にかけられているイエスの弟子でしょう。」とばれてしまった時に、

いや、いや、そうじゃない、そうじゃないと、最後は「もしそうなら神に呪われてもいい」と呪いを賭けて誓ってまで否定して、

イエスさまを見事に裏切ったのです。

イエスさまにはたいへん世話になったけれども、

やっぱり自分可愛さに、自分のいのちが惜しくて、イエスさまを知らないと三度も否定したのです。

しかし、そのペテロがまるで生まれ変わったように、このペンテコステ以来、キリストを証しします。

今度は何者をも恐れることなく、大胆に、いのちを賭けてキリストを証しするのです。

つい数ヶ月前にイエスさまを裁判して殺した議会に、

今度は自分が立たされた時、ペテロは殺されることを覚悟でキリストを証しして叫びます。

**「この方以外には、だれによっても救いはありません。**

**世界中でこの御名のほかには、**

**私たちが救われるべき名としては、**

**どのような名も、人間に与えられていないからです。」**（使徒 4:12）

これは、実に、これ以上ないほど大胆な証言です。

そして、これを言わせたのも聖霊であったとあります。

「ペテロは聖霊に満たされて」（4:8）とあります。

「彼らはペテロとヨハネとの大胆さを見、

またふたりが無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、

ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。」（4:13）ともあります。

この他にも、よく読んでいくと、この使徒の働きには、「聖霊」という言葉が約 70 回ほど出てきます。

他の福音書、パウロ書簡を遥かに凌いで第一位です。

それを見ると、

聖霊がみことばを大胆に語らせることは勿論のこと、

悪を打って滅ぼし、

誤ちに陥っている者をたしなめ、

弟子たちに行く道を教え、

貧しい者を助け、

悪霊を追い出し、

病人を癒し、

教会の監督・長老を立てて、そうやって、教会の宣教の働きを励まして力づけます。

「こうして教会は、

**ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、**

**主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行った。」**（9:31）とあります。

どうして聖霊はこうまで力強くキリストを証しさせるのでしょうか。

それは、聖霊がキリストの栄光を私たちのうちにあらわすからです。

イエスさまは言われました。

「わたしが父のもとから遣わす助け主、  
すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」 ヨハネ 15:26

「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」 16:8

「わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。  
しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。  
御霊は自分から語るのではなく、聞くまを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。  
御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」 16:12-14

このように、

聖霊はキリストの栄光をあらわします。

キリストを証しさせます。

イエスキリストを信じる者は救われる、

永遠のいのちが与えられると、私たちに永遠のいのちの喜びを確かなものにするのです。

だから、大胆になれます。

たとえ死んでも神にさばかれることがない、

永遠のいのちが与えられる、

イエスさまのようにたとえ死んでもよみがえる、

天国に行くことができるのですから、

死ぬことを恐れない、死なないように死なないように生きるのではなく、大胆に生きるものとなれます。

いのちを賭けてキリストの福音を証しできるのです。

しかし、日本の教会には反省があります。

日本の教会は戦時中この点でペテロと同じ失敗を犯しました。

当時、日本の教会の牧師の中で、自分の信仰告白を最後まで貫いた者は極めて貴重でした。

例えば、当時治安維持法に違反したキリスト教教理の一つに再臨信仰でした。

最も保守的な聖書信仰の立場から見ると、

キリストが再臨する時には大日本帝国はキリストによってさばかれ、

これを治める天皇もキリストによってさばかれるはずでありました。

でも、それを正直に告白するならば、国体変革と天皇神聖の冒瀆という罪により処罰されることは明らかです。

それで投獄された牧師たちは、正直に告白するのをためらい、要するに誤魔化したのです。

例えば、当時、桑田秀延という日本を代表する神学者がいましたが、

社会情勢に詳しく神学的水準の高い知性派牧師である彼は裁判所で次のように再臨の教理を説明しています。

「問 『キリストの再臨と神の国という事について平易に述べて貰いたい。』

答 『神の国に付いては二つの観点があり、一は現在の、心霊的経験内に於ける「救い」そのことであります。二は将来的で、救いの完成を指すものと思います。』

問 『それでは神の国とは心霊的なものですか。』

答 『そうです。』

問 『キリストはその時具体的に再臨するのですか。』

答 『私たちが信仰上用いる具体的という言葉の意味は、例えば、神を実在するもの、即ち単なる觀念上の存在で実在としているような意味に於いて言うのであって科学上の具体性と全く別であります。』」

「元来、基督教には、キリストの再臨を以て歴史的なものと做す立場と、宗教的なものと為す立場とがあります。

歴史的なものと做す立場は、当然現在の、政治的なものと為るのでありますが、

宗教的なものと做す立場は、精神的なものは霊的なものとなるか、

更に一歩進めてより現実的に印象づけて説くにしても、

それは飽く迄、宗教的な領域に止まるものであって、歴史的現実とは厳に区別せられるのであります。」

つまり、信仰は信仰、そして現実が現実、と弁解して逃げたのです。

この高名な知識ある神学者は、

キリストがこの歴史のただ中に再臨すると告白することが国体に触れ、天皇の神聖を冒すことをよく知っていました。

それで、キリストの歴史的再臨を告白することを放棄してキリスト再臨を人間の意識の中に閉じこめてしまいました。

得意のバルト神学の二元論を狡賢く利用しながら信仰と現実とを分離させました。

そして、心の中の王座にはキリストが君臨するが、現実の世界は天皇が支配すると逃げたのです。

それでは、これとは対照的なホーリネス系の牧師の場合はどうであったでしょうか。

ホーリネス系の牧師たちは一般的に社会情勢に疎いでした。

それで、自分たちが逮捕された時、どうして逮捕されたのかわかりませんでした。

自分は国体を尊重し、天皇を尊敬して、熱心な愛国心をもって日本のために祈り奉仕しているのに、

どうして非国民呼ばわりされる必要があるのか、不当な言いがかりをつけられているとしか最初は思えなかったのです。

米田豊牧師はその時の様子を次のように説明しています。

「何のための検挙か。

一体あの当時は、何事にも頼らしむべし知らしむべからずという風であったが、

何のための検挙か、基督教団の中はさておき、旧ホーリネスの仲間の者にさえ、

ただ再臨問題の為だろう程度の漠とした評判が立っただけで、誰もはっきり知ることが出来なかった。

同信系統の者の中には、だから再臨は当分言わぬ方がよかろうと、再臨を説かなくなった者さえある。

一体何の為の検挙か。保釈になって出所してから、

いろいろの方面から聞いたことを総合して考えて見て、どうやら真相を？むことが出来た。」

そして、

自分たちが弾圧されている真相を理解した

ホーリネス系の牧師たちは、それからというもの、

それまで雄々しく説いてきた再臨信仰をなるべく引っ込めて、往生際悪くもひたすら自己保身に腐心していくようになります。

米田牧師の場合は次のように言い逃れしています。

「次に天皇のことについてのある時の調べに、K 警部補が極めて無造作に軽く、『天皇陛下に罪があるのか』と言った。

私は身震いするほど慄然とした。

そして襟を正しうしていても厳肅に答えた。

『天皇は神聖にして冒す可らず、そんな事は日本国民として思うべきでも言うべきでもないじゃありませんか。』

この時はそれきりで済んだが、私は危ういところ陥れられるところであった。

次の日が三日後に、今度は、その時も極めて無造作に、『天照大神には罪があるのか』との問いである。

その時も私は厳かに『日本国民としてそんなことは言うべきではないでしょう。』と答えた。」

この後も結局この牧師は、何度もなされる同じ質問に

「日本国民としてそんなことは言うべきではないでしょう。」と答え続けてしらをきったと言います。

要するに、逃げたのです。

口を閉ざして逃げたのです。

口を閉ざして、

最後まで

「日本国民として

そんなことは言うべきではないでしょう。」で

逃げ切るのも何とも滑稽な話ですが、

それに加えて、

実質上「天皇は神聖にして冒すべからず」と

天皇が神であると告白してしまっているのですから、

事実上の棄教と見なし得るであろうと思いますが、

本人はそうは気づいていないというのも何とも哀れな気がします。

これ以外にも、次のようなものがあります。

「『天皇は歴史的の神であります。』...

特に聖書によれば我が日本国は日出ずる国であり、天皇は神より遣わされた使命者であられる。」

「『自分ら個人としては神宮に対し奉り崇敬感謝御徳をお慕い申し、

国家的宗旨として、御皇室又国家の御先祖の神としてどこまでも拝してきたのですし、』

教義が国体にあわぬことに気づかないで来たのは、わるかった」

「大日本帝国憲法は、天皇は神聖にして冒すべからずとしてあります。

ですから我々は天皇を心の中でも批判しないことにしています。

我々には天皇を批判する権限がありません。」

「(天皇も結局人間だろうという特高の誘導尋問に対して、)



『あなたは今、天皇に対して暴言を吐きましたね。私はこれを問題にしますよ。』』

以上見てきたように、

知性派とは対極的に位置するホーリネス系の牧師たちは、

知らぬ存ぜぬを貫き、あるいは全く抵抗にならぬような詭弁を弄して、往生際悪くひたすら逃げたのです。

彼らは社会的な知識には疎かったのですが、

神学的には保守的な信仰を持っていたため、

即座に自分の信仰を否定するようなことを言うのをためらいませんが、

出来る限りの詭弁を弄しながら、自分の信仰を捨てずに国体に反しない言動を探ろうと腐心しました。

しかし、そういう詭弁も通じなくなった時、残念なことに、そのほとんどは信仰の告白を捨てて「転向」しました。

つまり、

知性派の牧師は、

「信仰は信仰、現実 is 現実」と割り切った論を展開して言い逃れをし、

そうでない牧師は、

最後までしらばくれる形で、自己保身にひた走ったこととなります。

そして、

今日私たちが反省を込めて知らねばならないことは、こういう告白は聖霊によるものではない、ということです。

それは人間のことばです。

神のことばならぬ、人間の言葉です。

人間が、自分の知恵、力によって語った言葉です。

こんな言葉は、いくら語ったとしても、罪の世を造りかえるものではありません。

世界を新しく造りかえるものではありません。

こんなものは福音宣教ではありません。

違う福音です。

パウロの言う「ほかの福音」(ガラテヤ 1:6,7)です。

聖霊はこのような人間の言葉をみんなぶっ飛ばします。

そして、神のことばを語らせて、キリストの栄光をこの世にあらわすのです。

キリストを証しさせます。

日本では、牧師たちが悪魔に惑わされて「ほかの福音」を語っていた時、

その同じ時代に、韓国では、聖霊によって「真の福音」を語っていた人たちもいました。

それが朱基徹牧師たち抵抗者です。

「人間はすべて同じです。天皇といえども、神を信じず、罪を犯せば地獄へ行きます。」

「キリストは宇宙創造の主として日本帝国も創造したのである。天皇陛下も罪人であるから悔い改めなければ滅びる。」

(以上朱基徹牧師)

「日本の天皇陛下は人間であります。」

「天皇を現人神と言うことはできません。」

「天皇政治に於いて我らキリスト教徒にとっては偶像である神社参拝を強要することは

エホバ神の御意志に反逆することですから、現代日本政治に対しては絶対的に不平不満を持っています。

また、日本は支那と戦争中ですが、国民の生活財産を奪い、近年、災害、水害、悪病の影響で国民全体の不幸が続いています。…… まず現代天皇統治制度である日本國體を滅亡させて、

キリストの再臨後に来るべき無窮の世界である地上天国を建設しなければダメなようです。」 (以上孫良源牧師)

これは、その時代に於いて、悪魔による暗黒を吹き飛ばす一言でした。

みなが天皇と天照大神一色で、

神と人に対して罪を犯して滅び行く時代にあって、

人々の目を呼び覚まし、世界を新しく造りかえる真理の言葉です。

神のことばです。

滅び行く世に神の国をもたらすことばです。

地獄のようなこの地を変えて神の国となる神のことばです。

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。

そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

聖霊は、弱い弟子たちがキリストを力強く証して生きるよう力づけます。

キリストに罪贖われた喜びと感謝をもって、キリストを証して、この罪の世に神の栄光をあらわして生きていきましょう。